

LIBRARY NEWS

2016 年

第 17 号

—巻頭言—

図書館運営委員 石川 健二

読書は洞察力を高める

物事を深く熟考して理解しようとする能力を思考力といいます。一方、洞察力とは、視覚的な観察から得られた情報を基にして、自分の都合のよい主観的な解釈ではなく、物事の在り様をあるがままに観照したときに、物事の本質を直観的に見抜く力をいいます。

洞察力を身につけると、臨床場面でも対象者表情や態度、言動から体調や心理状態など内面的な部分を察知することにもつながります。療法士として重要なのは、自己の世界のなかだけで思考しつづけることよりも観察力と洞察力を高める努力を怠らないことであると思います。

そこで洞察力を鍛える方法として、やはり読書をお薦めします。事件を通して複数の登場人物が、それぞれの視点で描かれた推理小説や事物の背景を捉えながら、会話の心境を読み解くドラマのシナリオを読んでみてはどうでしょう。きっと自分の想像とは異なった事物やストーリーをあるがままに受け入れた時、観照する視点が広がると思います。

偶々息子が読んだ「小説君の名は。」の文庫本を手にとると不覚にも没入してしまった。映画では様々なシーンが俯瞰的な映像により三人称で描かれているようですが、小説では瀧と三葉のふたりの視点のみの一人称で構成されている。前世と現世の狭間にある時空間の複雑な展開から、より洞察力が湧き立てられる原作本でした。

日常での何気ない「本」との偶然の出会いが、意気地ない心を強くさせ、自己の世界を広げてゆき、より深化させてくれるのかもしれません。

洞察：名）物事を観察して、その本質や、奥底にあるものを見抜くこと。見通すこと。（goo 国語辞書）

PT 森藤 武 先生 推薦

『竜馬がゆく』

(司馬遼太郎) (著) / 文藝春秋; 新装版 /

1998 年 9 月 / 702 円 (全 8 巻) 【請求記号 913.6 S】



若い学生の皆に読んで欲しい本を考えたとき、真っ先に「竜馬がゆく」が頭に浮かびました。この本は幕末維新を先導した坂本竜馬の青春歴史小説です。若い頃、私は歴史小説をよく読んでいましたが、中でも、この本の作者である司馬遼太郎の作品は随分と読破しました。

司馬作品に登場する主人公はどれも魅力的な人物ばかりでしたが、竜馬ほど純粋で大志を抱いた魅力的な人物はいなかったと思います。その大志が、身分を超えて多くの人を動かし大政奉還を成し遂げるのですが、周りの志士がその後の役職を気にする中、竜馬は高い役職に就くことに興味を示さず、「世界の海援隊でもやりますかいのう」と言っただけ、その潔さと器の大きさに感激したことを覚えています。

若い青年時代には、その頃にしか感じる事ができない‘みずみずしい’感受性があり、年齢を重ねた今の私がこの作品を読んでも、かつての感動を味わえないだろうと思います。

全 8 巻と読破するには労力を要しますが、若く、エネルギーにあふれ、大きな希望に満ちている学生諸君に是非読んで欲しい 1 冊です。

OT 武井 麻喜 先生 推薦

『嫌われる勇氣 - 自己啓発の源流「アドラーの教え」 - 』

(岸見一郎 / 古賀史建) (著) / ダイヤモンド社 /

2013 年 12 月 / 1,500 円 【請求記号 146.1 K】



「嫌われる勇氣」そんな勇氣は私にはない。

「人には嫌われたくないから、自分のことは置いといて、常に相手に気を遣って、嫌われないようにしよう。」
この本を読む前までは、人と接する際にはこのようなことを無意識のうちに考えて行動していた気がします。
こんな悩みも持っていました。

何故、自分はいつまでも変わらないのか？

何故、自分は劣等感を克服できないのか？

何故、自分は過去にとらわれてしまうのか？

何故、自分は今、幸せを実感できないのか？

しかし、この一冊を読み終えたあと、すべての悩みに答えが出た気がしました。

本書では、フロイト、ユングと並び「心理学の3大巨頭」と称されるアルフレッド・アドラーの思想（アドラー心理学）を紹介しています。アドラーの幸福論は、自分が自分らしく生きていくためのヒントを与えてくれると思います。

因みに、本書は「青年と哲人の対話」という物語形式で進められていくので、大変読みやすいです。

是非一読を。

『次郎物語』

下村 湖人（著）／新潮文庫／

1987年6月／810円【請求記号 913.6S】



Library News に推薦図書をとの依頼をいただき、「どの書籍を推薦しようか」と思うやいなや、堰を切ったように頭の中で書籍が氾濫をはじめた。

哀愁をみごとに表現されている辻邦夫の『円形劇場から』や『回廊にて』。まるで論文のように『仏典』を詳細に調べられ、それをもとに文学作品に仕上げられている4巻からなる三島由紀夫の『豊饒の海』。読書後、足元にセルを着た人が座っているのではと眼を開けられない程の恐怖を覚えた遠藤周作の『怪奇小説集』。残念ながら品切れ（絶版？）が続いているが、ノーベル物理学賞受賞者である朝永振一郎による『わが師わが友』。この書籍は同様にノーベル物理学賞受賞者である湯川秀樹の『旅人』と併せて読んだことで、「優しさ」、「つよさ」ということについて考えさせられたものである。犬好きの人が犬を散歩させ喜びを感じるように、鳥好きの人間が鳥の研究をして喜びを感じることも云々との言葉より、自分を活かせる仕事に就くことを納得させてくれたノーベル生理学・医学賞受賞者であるニコラース・ティンバーゲンの『鳥の絵本』。

その他にも新しいところでは、物事を成し遂げることの充実感を思い起こされるとともにピカソという画家を身近に感じられる原田マハの『暗幕のゲルニカ』。或いは漫画ではあるが、手に汗を握りながらも、「恨む」気持ちの脆さにパンドラの箱でもないが「希望」を持つことの大切さ。また、「仲良くする」ことの力強さを伝えてくれる『うしおととら』と。氾濫してくる書籍はとどまることを知らない。

また、それらの書籍には単に、「本」という物体に終わらずそれぞれに読んだ時の状況や感想が回想され、しかも経年というエネルギーが思い出を美化しており、その想いに浸るというおまけまでついてくる。

そんな中で、今回は下村湖人著作『次郎物語』を推薦したい。この書籍は、昨年の卒業生が国家試験の自己採点を終えた直ぐ後に研究室に来てくれ、自己採点では合格している点を取れているので、仕事に就くまでの間に本を読みたい。ついては、先生がこのような時期に読まれた本があれば教えて欲しいと言われ薦めたものである。『次郎物語』は、主人公本田次郎少年の成長の過程を5部に分け成人まで描かれた物語である。幼少期が書かれている第1部、第2部は、幼少期に里子に出されたりという環境の中で次郎が、成長していく過程がえがかれおり、作者がハリー・スタック・サリヴァンの精神的な発達理論を思い起こされる内容である。それを裏付けるように森省二はその著書『子どもの対象喪失』に引用している。また、教育的な小説と位置づけられ、テレビドラマや映画の題材にも取り上げられ比較的知られている。しかし第3部以降になると、その存在をも知られていないのではと思われる。

今回は、この第3部、次郎が2度目の挑戦で 中学に入学したところからはじまる物語を特に紹介したい。ただし、第3部から読み始められても物語を理解するのは難しいことを 申し添えておきたい。

第3部は、次郎が兄恭平とその友だちである大沢と旅をする場面から始まる。川の上流を目指し計画もなく、泊まる所もその場その場で泊めてもらえるところで泊まるというものである。「無計画の計画」を1つのテーマとして話は進められるのであるが、旅の場面を通じ、まず「無計画の計画」が無謀なものでないことを示唆した上で、読み手に「無計画の計画」というテーマでの思慮に誘い込むものである。

この「無計画の計画」を、個々のそれを求めて知的な旅に出かけていただければと、この書籍を勧める次第である。



第4回 読書感想文コンクール選考結果

9/23（金）、第4回読書感想文コンクール表彰式が行われました。

「日本語力向上」、「病気・高齢者・障がい者が執筆した本を読むことによって対象者を深く理解する」ことを趣旨・目的として、本学学生を対象に、読書感想文コンクールを毎年、年に1度実施しています。

今年度は6名の学生が入賞し、亀井学長から表彰されました。

■最優秀賞（1名）

作業療法学専攻 3年 森口 優海 さん
「音のない世界と音のある世界をつなぐ」

■図書館長賞（1名）

言語聴覚学専攻 1年 北中 佑佳 さん
「音のない世界と音のある世界をつなぐ」

■優秀賞（1名）

言語聴覚学専攻 3年 北浦 しおり さん
「モリー先生との火曜日」

■佳作（3名）

作業療法学専攻 1年 白木 菜々実 さん
「ジキルとハイド」

言語聴覚学専攻 1年 山田 美和 さん
「星の音が聴こえますか」

言語聴覚学専攻 1年 喜多村 沙南 さん
「ひまわりと子犬の7日間」



亀井学長、OT専攻 武井先生、ST専攻 馬屋原先生と一緒に、表彰状を手に記念撮影。

課題図書一覧

- 『音のない世界と音のある世界をつなぐ』 松森 果林（著） 岩波書店
- 『酔いがさめたら、うちに帰ろう。』 鴨志田 穰（著） 講談社
- 『天国で君に逢えたら』 飯島 夏樹（著） 新潮社
- 『ラッキーマン』 マイケル・J・フォックス（著） リットンパブリッシング
- 『モリー先生との火曜日』 ミチ・アルバム（著） NHK出版
- 『記憶力を強くする』 池谷 裕二（著） 講談社
- 『子どもの声を社会へ』 桜井 智恵子（著） 岩波書店
- 『沖縄ノート』 大江健三郎（著） 岩波書店



最優秀賞

「音のない世界と音のある世界をつなぐ ユニバーサルデザインで世界をかえたい！」

作業療法学専攻3年

森口優海さん

課題図書を選んでいたら、この本の小見出しが目に入った。「聞こえないことは外見ではわからない」という少し太字の文字は、私に数日前の電車でのことを思い出させた。その時私の近くにいた女の子たちの小さな笑い声が聞こえたのである。しかし彼女たちは話し声を出さず、少しの身振りで意思疎通をしているようであった。もしかして障害者なのだろうかと思い付いたのは、それから数駅を挟んで、彼女たちが話し声を出さぬまま電車を降りていった時だった。外見は私と何も変わらない。しかし彼女たちの世界に音はない。その気持ちを知りたいと思い、この本を選んだ。

作者である松森果林さんは、途中から聴力を失った「中途失聴者」であった。つまり彼女は音のある世界と音のない世界の両方を知っているのである。この本はそんな彼女だからできた、ユニバーサルデザインを通じた世界への働きかけについて綴られている。CMに字幕をつけるなど、彼女は多くのユニバーサルデザインやバリアフリーに携わってきた。しかし、そこに至るまでの彼女の苦悩は決して軽いものではない。中途失聴者である彼女は、世界からゆっくりと音が消えていく様を感じていた。小学四年生から約八年かけて音は緩やかに遠ざかり、友人との会話もままならなくなっていく。そんな状況に私は耐えられるだろうか。更に彼女は高校に入学するまで、失聴が進んでいることを誰にも打ち明けられなかった。からかわれ、聞こえないことは恥ずかしいことだと認識したのである。幼い彼女に周囲がもっと理解を示せたなら、と思う。しかし松森さんは、自分も行動すべきだったと書いている。「外見ではわからない」なら伝えなければならない。双方がわかりあう努力をすることが必要なのだ。当時の葛藤の中に「私はどうしたら良かったのでしょうか」という一文があった。前後には行間がとられていたが、気持ちを綴るために行間をとっていたのはここだけで、感情の強さが伝わってきた。それ程に追い詰められていた彼女が今、生きて世界に働きかけられるのは、歩み寄り、支えあえる人に出会えたからなのだろう。それは失聴者や障害のない人に止まらず、車椅子に乗る人、見えない人と様々である。出会う機会を作ったのは、歩み寄ろうとした彼女自身であった。彼女は多くの出会いにより、様々な視点からユニバーサルデザインを考え、世界に向けて発信する。

松森さんは高校時代の日記に「ふつーがよかった。」と書いている。しかし彼女は今、「聞こえないことが私の強みです。」と述べる。音のない世界を知ったからこそできることがあり、二つの世界を繋ぐことが自分の役目だと胸を張っているのである。私はどうだろうか。療法士を目指して勉強をし、患者と触れあった私ができること、すべきことを今一度心に刻みたい。



図書館長賞

音のない世界と音のある世界をつなぐ」を読んで

言語聴覚学専攻1年
北中 佑佳さん

私がこの本を選んだ理由は、自分が作者と同じ進行性難聴と判った頃、同作者が執筆した「星の音が聞こえますか」というエッセイ本に出逢いとても励まされた。また、徐々に失われていく自分の聴こえにショックを受けた時期に、本書「音のない世界と音のある世界をつなぐ」が出版された。この本に何度励まされ、何度支えられたか。そして、私に前を向かせるきっかけをくれた一冊であったことからこの本を選んだ。

作者は、進行性難聴の影響により、小学4年生の頃に一側耳の違和感や失聴を味わい、中学生の頃に反対側耳の聴力低下と失聴した経緯を持つ中途失聴者である。彼女の「聞こえないのは出来るだけ隠しておきたい」「できるだけみんなと同じようにしたい」という思い、「聞こえたフリ」をしようと頑張った時期、「聞こえない事は外見では分からない」と言われ考えた時期、先生に「あなたは障害者になったのだから障害者としての生き方を考えるべき」と言われ絶望した時期もあったが、ある先生の「障害者なってもあなたの価値は変わらない」という言葉をキッカケに作者の世界感が変わりはじめる。人々との出会いを通して沢山の学びと世界観をひろげ聴者と難聴者の架け橋になりたいと働く作者。ママとして学ぶだけでなく、ユニバーサルデザインや、東北の大震災の経験を通して聞こえる者に伝わらなかった色々な出来事や思い、障害について、私達に伝えてくれる。

私が作者の本との出逢いは、自分が病名を知った病院の先生が奨めてくれた1冊である。この本の前身「星の音が聞こえますか」であった。本を読み進めて行くうちに、「自分だけがこんな想いをしているのではない。」と気づき、私の心をどんどん軽く、どんな風に行動し生きれば良いのかを教えてくれる1冊となった。それからまもなくして、この本と出逢う。この本には、自分の体験した事の無い東北の大震災の話が載っている。被災した聴覚障害者や作者が体験した事柄が記載されており、自分が思う以上に、災害に遭遇した時の恐怖感や情報障害の怖さを知ることができた。

もしも災害に遭った時、聴覚障害だけでなく他の障害を持つ人々に対し、少しでも不安の緩和に繋がる声掛けや支援方法などを考えていきたい。今、自分に出来る事があるとすれば、たくさんの知識を持ち、同じ中途障害を負った人に寄り添い、何を求められ、出来るかを考える事だと思う。そして、将来、実習や社会に出た時、常にシンキングし、より良い生活を送れる手助けをする事ではないだろうか。今は、自分の障害に手一杯になり易いが、見直しと出来る事に目を向け、今より広い視野を持ち、人に接する事の出来る人になりたいと思う。自分の視野を広げられるこの良き図書に出逢えたこととこの機会に感謝したい。



優秀賞

モリー先生との火曜日を読んで

言語聴覚学専攻 3年

北浦しおりさん

この本は ALS に侵された教授と教え子の 14 週間にわたる週に 1 度、火曜日に行われる授業の話である。

この本を手にとった理由はテスト終わりに図書館に行った時に目が留まったからである。テスト終わりということもあり活字に飢えていたのかもしれない。

読み始めは外国の本を日本語に訳された本であるため、難しい言葉があったり聞きなれない片仮名があったりして読み辛かった。しかし、中盤まで読み進めていくと話の内容が気になって普段は移動中にしか本を読まない私が家でも本を開くようになっていた。

私が一番心を打たれた部分は ALS になる前に戻れるとしたらという教え子の質問に教授が答えた言葉である。驚くことに教授は「絶対ない。」と答えたのだ。さらに、もし健康な日が 1 日あるとするならという質問には健康だった日の日常を繰り返すと答えている。私がもし教授と同じ状況になって同じような質問をされたら、健康な体でやり残したことや健康な体でできていたこと以上のことをしたいと思うはずだ。

教授は死ぬことを怖いことだと考えていない。「死ぬのは自然なこと」だと言っている。確かに自然なことではあるが病気で死ぬのだから多少の恐怖はあっていいと思うのだが、教授にはそんな素振りは見られないように書かれていた。教授はしっかりと病気のことを受容していてすごいと感じる。

教授はたくさんの人から愛されている。その場面がたくさん本で描かれている。私は教え子の立場でしかまだ考えられないが、恩師と呼べる先生が今までいない。また、会いに行こうと思える先生もいない。こんな先生に出会えた教え子を羨ましく思う。この教え子は教授がなくなった後もお墓を訪れ現在を報告している。

この本を読む前から ALS に関しては興味があり、関係のあるドラマや資料を見ていたが、ますます ALS について興味が増えた。この教授は人工呼吸をつけないという生き方を選んだが、この時代もホーキン博士という現在も生きている ALS 患者がいる。現在はこの本に出てくる医療よりも遥かに進歩している。それをますます学びたいと考える。

佳作

ジキルと私。

作業療法学専攻1年

白木 菜々実さん

ジキルとハイドという作品が二重人格を題材としていることは言うまでもない。本に興味のない人でも題名ぐらいは聞いたことがあるのではないだろうか。この本を手にとったきっかけは些細なことで、偶然目に留まったからである。療法士という職を目指して半年たった今、この題材はどうにも無縁なものとは思えなくなっていた。そしてそれが決め手となり、私はこの本を読むに至ったのである。

作品の舞台はロンドン。ジキルという高名な紳士の側に、ハイドという不気味な小男の影がちらつくようになる。ジキルが高潔で両親を持ち合わせた医学博士である一方、ハイドは残忍極まりなく、恐怖と嫌悪でできたような人間である。ジキルの友人であるアスタン弁護士がハイドの噂を聞いた所から、この二人の男の謎が浮き彫りになっていく。そして最終章、手記に書かれたジキル自身の告白によって、見てくれも性格も全く違うこの二人の男が同一人物であったと発覚するのである。ジキルは、自らが作った薬の力によって自分の中にある善と悪の二面を分離し、全く違うもう一人の人間を生み出してしまった。やがてジキルはこの二つの人格を頻繁に往復するようになる。そして、最後には元の自分であるジキルを失いかけて自殺をし、物語は幕を閉じる。

私がこの物語の中で最も強く感じたのは、全ての人間が持つ善と悪の二面性についてである。私の中にもこの両方がある。善の側面では「良い人でありたい」と思うのに対し、悪の側面では人を嫌ったり攻撃的になったりする。おそらく、この世に純粋な善人や悪人はおらず、皆がこの両方を持っているのだろう。ジキルは自分の中にある悪の側面を認めることができずにハイドを生み出した。故に人格の交代が制御できなくなった時、ハイドという恐怖に心身を蝕まれながら死んでいったのである。それは自分の一部である側面を否定し、不当に抑圧した結果ではないだろうか。このような過ちを犯さない為には、善と悪の両方を持つ自分を受け入れ、直視すべきなのだと思う。う。加えて、ジキルは友に助けを求めず、頼ることを拒み続けた。私は、誰かに何かを打ち明けたり頼ったりすべき時が、また、誰かを支えるべき時があることを忘れてはいけないと思う。

ジキルのような心の葛藤は誰にでも起こりうる。しかし、その対立している二面性はいずれも自分の一部であり、その両方を持つからこそ一人の自分として在ることができるのである。どんなに辛くとも、自分から逃げてはいけない。私はこの作品を読んだことで自分や他人の葛藤にどう応じていくべきかを深く考えることができた。私はジキルのような過ちを犯さない為に、これからは自分の中の二面性と真摯に向き合っていきたいと思う。

佳作

星の音が聞こえますか

言語聴覚学専攻1年

山田 美和さん

私がこの本を選んだ理由は、四つある。友人の推薦、課題図書「音のない世界と音のある世界をつなぐ」を先に読み終えて「聞こえないこと」に対する著者の小学生時代からの受け止めの変化を本書を読むことにより詳しく知りたいと思った、私自身が聴覚について聞き返しがあると最近自覚し始めた、視覚についても老眼鏡の使用に抵抗感があったが文字が見つづらくなり困るようになったからである。これは現実を受け止めざるを得ない。

作者の松森さんは小学4年で右耳を失聴。中学から高校2年の冬にかけて左耳の聴力も失う。その経過は詳細で壮絶だった。高校3年の6月に教師の薦めで、日本で唯一聴覚や視覚に障害があっても学べる、「筑波技術短期大学(現在の筑波技術大学)」を見学する。耳の聞こえない学生たちが「手話」を使って自由自在にコミュニケーションしている様子を初めて見る。そしてその姿に驚く。講義でも、手話を使う先生や、先生が話したことがリアルタイムで文字通訳されるシステムを初めて目にする。授業のチャイムはフラッシュランプで知らされた。そこには、聞こえないことでのバリアがなかった。仕方なく行った見学だったが、帰りには「絶対あの学校に入る！」と宣言していた。目標が決まり、猛勉強し、デザイン学科に入学。なによりも驚いたのは、聴覚に障害を持つ教授・助教授の存在。おかげで聞こえなくてもいろんな仕事に就けるのだとわかった。日常会話程度の手話は1か月程度で覚え、口の形を読み取る読話も授業で学べた。

11歳のときから「聞こえないことは悪いこと、恥ずかしいこと」と思い込んで身構えていたが、少しずつ「自分らしさ」をつくりあげていく。それは「聞こえない」現実、そして自分を受け止めるということだった。

在学中に担当教授や仲間と「聞こえなくても東京ディズニーランドを十倍楽しむための提案」をまとめて、運営会社の重役の前で発表し、後に東京ディズニーランドとディズニーシーでそれが実現した。手話のできるキャストが100人以上いて目印にミッキーの手をデザインしたピンバッチを付けている、アトラクションには背景やストーリーを説明した「ストーリーペーパー」が用意されている、などだ。

これがきっかけとなり、「ユニバーサルデザイン(年齢、障害、性、言語等にかかわらず最初から誰もが使いやすく、楽しく利用できる施設・製品・情報・設計・社会を考えること)」が松森さんの人生のテーマとなる。私はこれは高齢者の認知症予防にもつながるのではないかと期待している。

この本は面白いエピソードも満載で学生時代の寮生活・一人暮らし・クラスメイトとの海外旅行・仕事・恋愛・妊娠・出産・子育てなど、聴覚障害があってもそれを乗り越える工夫をユーモアを交えて教えてくれる。想像だけでは思いもつかない当事者の本音があった。このような本は大変貴重な意見となるので、他の本も参考にしていきたい。

佳作

ひまわりと子犬の7日間

言語聴覚学専攻 1年
喜多村 沙南 さん

私がこのお話を選んだ理由は二つあります。一つ目は、家で犬を飼っているからです。二つ目は、タイトルを見たときにこの七日間の間に何が起こるのだろうと気になったからです。

このお話は、宮崎県で小さな農家を営んでいる飼い主の長友夫婦の奥さんが亡くなり、旦那さんが老人ホームに入ることになったため、野良犬になってしまった犬(後のひまわり)を保健所職員の神崎彰司が保護し、殺処分になってしまう七日間の期間を一緒に過ごしたのち、神崎一家の一員になるという奇跡と感動の物語です。

私はこのお話を読んで、印象に残った場面がいくつかあります。

一つ目は、長友夫婦の旦那さんが施設に向かう車に乗って出発した後、ひまわりがつながれていた鎖をちぎって必死に追いかけていくシーンです。私の飼っている犬も、家族が出かける準備をしている時から吠えたり必死に追いかけてします。もし、自分が長友さんだったらと考えるととても悲しいですし、悔しい気持ちになります。また、必死に吠えて、追いかけてようとしているひまわりの姿を忘れることはできないと思います。逆にひまわりの立場に置き換えてみても、飼い主が離れていく悲しさや行かないでほしいという気持ちを伝えることができない悔しさは同じだと思います。犬を飼うことはとても癒されますし、楽しいことですが、別れるときは人間にとっても犬にとっても本当につらいことなのだと思います。

二つ目は、ひまわりが保健所で殺処分になるまでの七日間ずっと彰司さんがひまわりのそばで世話をしていたおかげで、ひまわりが野良犬になる前の生活や、自分に優しくしてくれた人たちを思い出すシーンです。ひまわりは野良犬になってから人間にひどいことをされることが多く、そのせいで人間を信じるができなくなっていました。人も同じですが、ひどいことをされたり、とても傷つくことを言われたりされたりするととても傷つきますし、一生といっていいほどその人を信じるができなくなってしまうと思います。また、そのような体験を乗り越えて次に進むことも簡単なことではないと思います。それでも再び人を信じることができたひまわりはすごいと思います。また、ひまわりをこのようにした彰司さんの愛情もすごいと思います。

私が目指している言語聴覚士の仕事は、人とかかわりやコミュニケーション力が必要になります。私はこのお話を読んで、彰司さんとひまわりから人とかかわり方や、相手を思いやる大切さを学びました。これから先、この気持ちを大切に、また、忘れずに歩んでいきたいと思っています。

法人設立 20 周年 大学開学 10 周年記念誌ができました



法人は平成 9 年に設立し 20 周年を、また大学開学以来 10 周年を迎え、記念誌が作成されました。

平成 28 年 11 月 6 日の記念式典の来賓にも配られました。

開校の経緯、本学の特徴と様々なデータ、そして大学の展望について書かれています。

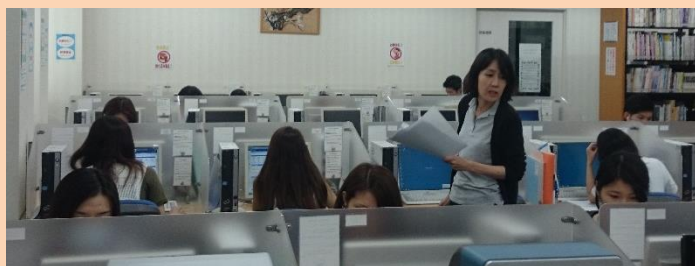
また、河崎理事長と各専攻の先生方の座談会も収録されていて、読みごたえのあるものになっています。

図書館に所蔵していますので、ぜひご覧ください。

卒論にも役立つ！

文献検索講座もやってます！

図書館では、論文作成に役立つ文献検索のお手伝いをしています。



2016 年 8 月 3 日（水）の文献検索講座の様子です。

医中誌[※]やメディカルオンラインについての説明をみなさん熱心に聴いていました。

※『医中誌』とは、医学中央雑誌というデータベースです。

約 5,000 誌の雑誌が収録されており、論文作成には欠かせない存在です。

～こんな本もあります～

『わかりやすい医中誌 Web 検索ガイド』

諏訪部直子・平紀子(著)／日本医学図書館協会／
2013 年 10 月／1800 円／請求記号 490.7 S

検索事例が付いているので、分かりやすくなっています。
医中誌を使う時の参考にしてください。



卒業後も図書館を利用できます！

～卒業後も施設利用カードの発行をすれば貸出できます！ ぜひご利用ください～

★施設利用カードについて

希望者には 3 年間有効の施設利用カードを発行します。

(無料。原則、2・3 日後のお渡しとなります。)

発行希望の方は、1 階事務室 総務課 庶務係にお越しください。

※初回は、**身分証明書** (運転免許証・健康保険証等) をお持ちください。



★利用範囲

貸出	○	貸出可能です (一人3冊まで 2週間以内)。
閲覧	○	これまで通り出来ます。
資料検索 (OPAC)	○	これまで通り出来ます。
コピー	○	これまで通り出来ます。
文献取り寄せ (有料)	○	平日 月～金の 9 時～17 時の間に直接来館の上、申し込んでください。電話やメール等での申し込みはできませんので、予めご了承ください。
プリントアウト	×	プリントアウトはできません。
データベース (メディカルライオン・医中誌)	○	学内でのみ利用可能です (学外からはアクセスできません。利用される方は本学へお越しください)。



2016 年4月～11月

貸出ランキング



順位	貸出回数	書 名	書 誌 情 報
1	30	病気がみえる v.7 脳・神経	492 B 7 / 医療情報科学研究所 / 2011 年 3 月
2	29	解剖学 標準理学療法学・作業療法学：専門基礎分野	494.78 N 1 / 医学書院 / 2015 年 1 月
3	20	高次脳機能障害学	493.73 I / 医歯薬出版 / 2012 年 3 月
4	13	動作分析臨床活用講座	492.5 I / メジカルビュー社 / 2013 年 9 月
5	12	病気がみえる V.2 循環器	492 B 2 / 医療情報科学研究所 / 2010 年 8 月

◎編集後記

本学は 10 周年の節目を迎えました。これまで図書館の運営にご理解とご協力をいただきました皆様に心より感謝申し上げます。

私は、今年の 6 月に図書館に異動になり 7 ヶ月が経とうとしています。図書館で熱心に勉強している学生の方々を見ると司書としてうれしく思います。所蔵資料の『超訳 ニーチェの言葉』によれば、「学ぶ意思のある人は退屈を感じない」とのことです。学生のみなさんには、多くの知識を得て充実した学生生活を過ごしていただきたいと思います。私はそのお手伝いをさせていただきます。(鈴木)